

2

人間ドック

1 調査目的

がん検診における発見がん患者の精密検査結果の詳細を把握することにより、検診の評価を行い、精度管理の維持・向上を図る。

2 調査対象

令和元年度の人間ドックにおける胃・肺・大腸・子宮・乳・前立腺等の各がん検診受診者のうち、精密検査結果が「がん」または「がん疑い」と報告のあった者。

3 調査内容

調査内容は、当事業団が実施した胃・肺・大腸・子宮・乳・前立腺等の各がん検診における発見がん患者の精密検査結果および治療状況等とし、各がん取り扱い規約に基づいた内容について更なる詳細結果（報告）を求めた。

1] 取得方法

調査依頼先に対象者の発見がん追跡調査票を書留にて郵送し、回収した。

2] 調査依頼先

対象者の精密検査結果報告が提供された医療機関、または紹介先医療機関

3] 調査期間

初回調査：令和2年9月～10月

再調査：令和2年11月～12月

再調査は、以下の場合に実施

- (1) 初回調査の結果、転院が判明した者
- (2) 初回調査後、新たに精密検査結果が「がん」または「がん疑い」で戻ってきた者

令和元年度 人間ドックにおける発見がん追跡調査結果

令和3年1月31日現在

1 がん検診別発見がん追跡調査結果

	胃がん		肺がん*			大腸がん	子宮頸がん
	X線	内視鏡	X線	CT	喀痰		
受診者数	7,204	2,934	10,336	819	1,210	112,00	2,934
要精検者数	519	71	100	6	0	457	37
要精検率(%)	(7.2)	(2.4)	(1.0)	(0.7)	(0.0)	(4.1)	(1.3)
精検受診者数	387	61*2	86	6	-	322	33
精検受診率(%)	(74.6)	(85.9)	(86.0)	(100.0)	(-)	(70.5)	(89.2)
追跡調査数	3	2	0	5	-	8	3
追跡調査回収数	3	2	-	5	-	8	3
追跡調査回収率(%)	(100.0)	(100.0)	(-)	(100.0)	(-)	(100.0)	(100.0)
発見がん数*3	2	2	-	2	-	7	0
がん発見率(%)	(0.03)	(0.07)	(-)	(0.24)	(-)	(0.06)	(0.00)
早期がん数	2	2	-	0	-	6	-
早期がん割合(%)	(100.0)	(100.0)	(-)	(0.0)	(-)	(85.7)	(-)
陽性反応適中度(%)	(0.4)	(2.8)	(-)	(33.3)	(-)	(1.5)	(-)

*1 最終読影の結果がん以外で要精検となった者を除く

*2 医療機関を受診したものすべて含む

*3 発見がん追跡調査前にかんがんと判明し、かつその詳細結果を把握できた者も含む

	子宮体がん	乳がん	前立腺がん	腹部超音波*4	食道がん	甲状腺がん
受診者数	168	3,489	1,887	11,478	10,138	448
要精検者数	0	250	100	287	590	29
要精検率(%)	(0.0)	(7.2)	(5.3)	(2.5)	(5.8)	(6.5)
精検受診者数	-	222	71	220	448	24
精検受診率(%)	(-)	(88.8)	(71.0)	(76.7)	(75.9)	(82.8)
追跡調査数	-	9	11	8	0	2
追跡調査回収数	-	9	10	8	-	2
追跡調査回収率(%)	(-)	(100.0)	(90.9)	(100.0)	(-)	(100.0)
発見がん数*3	-	8	3	6	-	0
がん発見率(%)	(-)	(0.23)	(0.16)	(0.05)	(-)	(0.00)
早期がん数	-	5	3	-	-	-
早期がん割合(%)	(-)	(62.5)	(100.0)	(-)	(-)	(-)
陽性反応適中度(%)	(-)	(3.2)	(3.0)	(-)	(-)	(-)

*4 腹部超音波については、早期がん数、早期がん割合、及び陽性反応適中度は算出せず

2 がん検診別発見がん追跡調査結果

(調査回収数及び調査前に発見がんの詳細を把握していた数を併せた詳細)

人間ドック判定 A: 異常なし B: 軽度異常 C: 要経過観察 D2: 要精検 D3: 至急精検

1] 胃がん

	検診方法	治療方法	肉眼分類	深達度*	臨床病期分類	前年度	
						受診歴	検診方法 (判定)
1 男 30代	X線	腹腔鏡下手術	II c	M	I A	なし	-
2 男 40代	X線	外科手術	II c	SM	I A	あり	X線 (A)
3 女 70代	内視鏡	腹腔鏡下手術	II c	M	I A	なし	-
4 男 40代	内視鏡	腹腔鏡下手術	II b+ II c	SM	I A	なし	-

* 深達度M、SMが早期がん

2] 肺がん

	検診方法	治療方法	組織分類	臨床病期*	前年度	
					受診歴	検診方法 (判定)
1 男 60代	CT	胸腔鏡下手術	腺癌	III A	あり	CT (D2)
2 男 70代	CT	胸腔鏡下手術	腺癌	III A	なし	-

* 臨床病期分類 I Aが早期がん

3] 大腸がん

	部位	治療方法	深達度*	Dukes分類	Stage	前年度	
						受診歴	検診方法 (判定)
1 女 60代	直腸	内視鏡的粘膜切除	M	A	0	なし	
2 男 50代	S状結腸	腹腔鏡下手術	SM	A	I	あり (A)	
3 男 80代	横行結腸	ポリペクトミー	M	A	0	あり (A)	
4 男 50代	S状結腸	内視鏡的粘膜切除	M	不明	0	なし	
5 男 50代	直腸	内視鏡的粘膜切除	M	不明	0	あり (A)	
6 男 50代	下行結腸	腹腔鏡下手術	SS	B	II a	あり (A)	
7 女 60代	直腸S状部	腹腔鏡下手術	SM	A	I	あり (A)	

* 深達度M、SMが早期がん

4] 子宮頸がん

該当者なし

5] 子宮体がん

該当者なし

6] 乳がん

※ マンモグラフィ検査をMG、超音波検査をUSと表記する。

		検診方法 (判定)		治療方法	臨床病期* 分類	組織型分類	前年度 受診歴	前年度 検診方法 (判定)	
		MG	US					MG	US
1	70代	-	D2	乳房全切除術 化学・分子標的	II A	不明	あり	-	C
2	50代	D3	D3	乳房部分切除術 放射線・内分泌	I	浸潤性乳管癌 (腺管形成型)	なし		
3	50代	D2	C	乳房全摘出術 内分泌療法	0	非浸潤性乳管癌	あり	C	C
4	40代	D2	D2	乳房全摘出術 内分泌療法	I	粘液癌	なし		
5	40代	D2	C	腫瘍摘出術	0	非浸潤性乳管癌	なし		
6	40代	A	D2	乳房部分切除術 放射線・内分泌	II A	浸潤性乳管癌 (硬性型)	あり	A	C
7	60代	-	D3	乳房全摘出術 内分泌療法	II A	浸潤性乳管癌 (硬性型)	なし		
8	50代	D2	C	乳房全摘出術	0	微小浸潤癌	なし		

* 臨床病期分類0、Iが早期がん

7] 前立腺がん

		治療方法		Gleason分類	臨床病期* 分類	前年度 受診歴 (判定)
1	60代	手術療法		4+3	B1	あり (A)
2	70代	内分泌		3+4	B2	あり (D2)
3	60代	手術療法		3+4	B1	あり (A)

* 臨床病期分類B0、B1、B2が早期がん

8] 腹部超音波検査

			診断名	部位	治療方法	臨床病期 分類	前年度
							受診歴 (判定)
1	男	70代	膵癌	膵頭体部	化学療法	IV	あり (B)
2	男	50代	腎癌	右腎	手術	I	あり (C)
3	男	60代	肝癌	右葉前上区域	胸腔鏡下MCT	I	なし
4	男	50代	腎癌	左腎中極	手術	I	あり (B)
5	男	50代	腎癌	右腎中極	手術	I	なし
6	男	50代	腎癌	右腎	手術	I	なし

9] 食道がん

該当者なし

10] 甲状腺超音波検査

該当者なし

まとめ

令和元年度の各がん検診精検受診率は、「がん検診の事業評価に関する委員会報告書」に示されているがん検診精検受診率の許容値である70%は満たしていた。例年、大腸がん検診については、精密検査受診率が70%前後で推移しており受診率向上の為、当日保健指導の際には、精密検査の必要性や精密検査受診に関しての相談の場があることの説明を行っている。今後の大腸がん検診精密検査受診率について注視し、保健指導の効果について検討したい。

多くの検診において精密検査受診率の目標値である90%に達するため、医療機関との連携強化を図り、調査票記載不備による精検未把握者を減らす必要性が窺えた。今後も精検受診率向上のため検討を重ねたい。